

# 東京経済大学報

2015年度 第48巻 第2号

## 陸上競技部・

よしむらたくみ

## 吉村匠選手 (経営) (4年)

関東学生連合チーム  
メンバーとして

## 箱根駅伝 6区を走る!

## 新春を迎えて

謹んで新春のお慶びを申し上げます。皆様には平素から本学へのご協力・ご支援に感謝を申し上げます。

昨年3月の卒業式、4月の入学式には国分寺キャンパス第一期整備計画が終了し、グッドデザイン賞に輝いた5号館、図書館と新装となった大倉喜八郎進一層館や大倉翁の銅像を背景にご家族の皆様や友人達と新しいキャンパスを十分に満喫し、記念撮影をしている学生達を数多く見ました。

また、武蔵村山キャンパスも設計段階よりも整備され、野球部を始め、各部の新入生が増え、一般学生も含めて活発に使われています。さらに、地域の人々にも開放されたグラウンドや野球場の評判も良く、利用頻度は増加していると聞いています。

2015年度から、法人は第二期事業計画の初年度を迎えています。この3年間は、第一期事業計画がハードの整備に注力しましたので、ソフトの充実を主題に掲げ、堺学長の下で教学改革が進められています。法人としては、2020年以降の18歳人口の激減に対応していくうえで、この教学改革が大胆で革新的で、将来の本学の志願者を魅了するものになることを期待し、全面的にバックアップする所存です。

東経大ブランドの確立と他大学との独自性を保つためにも、建学の精神を日常的な教学の中に取り入れ、在学中に色々な局面で大倉魂を理解し、実業界で活躍できる基礎力を身につけることができるように、法人と大学が一体となってキャリア支援を充実させ、就職に強い東経大を経済界から評価されるよう挑戦します。

本年も皆様のご協力を宜しくお願いいたします。

学校法人 東京経済大学 理事長 **岩本 繁**



## 二度目の新春

皆様、あけましておめでとうございます。

新しい年の幕開けに当たり、2014年4月の学長就任以来の取組みの一端を述べ、最近の動向を紹介させていただきます。精力的に取り組んできたのは、教学改革です。まずは推進母体としての「教学改革推進会議」を創設。執行体制の強化として、学長補佐を二名任命しました。さらに、具体的な実施案を策定するいくつかの委員会を立ち上げました。

そうした動きと連動して、14年度は「教学改革プラン」、15年度は「中長期教学ビジョン」という、改革のための「たたき台」を公表しました。それは、教職員がそれぞれの立場で取り組んでいる課題・作業が全体的な枠組みのなかでどのように位置づけられるのかを明示するためです。今後は、教職員の意見を聞きながら、ビジョンを確定し、目標の達成に至るプロセスを示したロードマップを作り上げていきたいと考えています。

次に、関係者による懸命の努力の末に開花するに至った事例を3つほど紹介いたします。第一は、グローバルラウンジ コトパティオの開設。そのラウンジでは、ネイティブスピーカーが常駐し、英語などを話したい学生のニーズに応じてくれます。第二は、17年度からのキャリアデザインプログラムの実施です。それは、キャリアを軸にしつつも、1年次には学部を決めずに学び、2年次から学部を選ぶというものです。第三としては、基礎的な力、アカデミック・リテラシー、キャリア力などを育成するための科目群が17年度から導入されます。

大学をめぐる環境は、今後ますます厳しくなっていますが、本年も、皆様方のご理解とご協力を、よろしくお願い申し上げます。

東京経済大学 学長 **堺 憲一**



# グローバル ラウンジ コトパティオ のオープン

福士正博

経済学部教授 副学長

本誌48巻1号で、「グローバルラウンジ コトパティオ」の開設趣旨や準備状況などについてご紹介しましたので、この号では、オープン後の状況をお知らせします。



オープン日に開催されたキックオフパーティー。開設準備に関わった方々が参加

**フ**ローバルラウンジ コトパティオが、2015年10月1日(木)に本格オープンしました。オープン日には、開設準備に関わった関係者によるキックオフパーティーを開催しました。写真にもあるように、立食形式で、和気あいあいとした雰囲気の中、多くの方から、こうした国内留学スペースが作られたことについて期待するといったスピーチが行われました。その日

の午後、学生を中心としたパーティーも開かれ、多くの学生から、「このよな場所ができて嬉しい」、「ここに来ると、ネイティブスピーカーの人と直接会話ができて、ふだんの授業とは違う学びがある。とても貴重な機会だと思います」という声が寄せられました。場所の確保、運営方法や費用、コーディネートの人選など、オープンにいたるまでいくつもの課題がありました

が、一つひとつハードルを乗り越え、開設に向けて努力していただいた多くの方々に、この場を借りて厚く御礼申し上げます。  
**オ**ープンして間もないため、このよなスペースが作られたことを知らないという人も多いと思います。場所は、6号館の学習センターやキャリ

Global Lounge  
COTOPATIO

アセナターがある2階、オープン時間は平日10〜17時で、昼休みにも利用することが出来ます。口コミなどで、少しずつ広まっていくとは思いますが、コトバを磨く仲間が集うパティオ（中庭）として、多くの学生、教職員に積極的に利用していただければと願っています。

## フ

ローバルラウンジ コトパティオ」は、2014年7月に学長

から発表された「国際化ビジョン」の一環として、日本語以外の言語を自由に話す空間を作り、それを活用することで、国際的な視野を持つ学生を増やしたいという構想のもとに設けられたものです。開設目的はこのようにいささか堅い感じがするのですが、目指しているのは、自由な時間を使って、気軽に、ネイティブスピーカーとチャットできる場所、というものです。私自身、最初の留学のことを振り返ると、非常に悔しかった思い出が沢山あります。中学から10年以上英語を学び、英語文献や新聞記事などを読むことや、ある程度読解することはできてはいても、いざ、ロンドンの街中に突然一人放り出されてみると、聞き取れない、話せない、まともに買い物もできないという状況に追い込まれてしまいました。言葉ができないために、ホテルの

予約もできず、野宿をしそうになったこともあり。その時痛切に感じたのは、「使えない英語を勉強してきたこれまでの10年間は何だったのだろう」という思いでした。ふだんから英語を話す機会があれば、こんなに悔しい思いはしなかったはずだ、勉強の仕方が間違っていたのではないか、という思いです。周りにネイティブスピーカーがいて、気軽に話す機会があれば、度胸もついたでしょうし、文法の間違いなど気にせず、ただどかしい英語でもある程度コミュニケーションはとれたはず。私が「グローバルラウンジ コトパティオ」の開設に関わってきた背景には、個人的なこうした思いと、自分なりのリベンジがあります。そのようなハードルの低い、しかし使える英語の実力が確実に上がる場として、このスペースがあります。

## こ

これから留学を考えている人や外国旅行をしようとしている学生に、

ぜひのぞいてみてほしいと思っています。学生たちには、学内の看板やチャシ、TKUポータルなどで「グローバルラウンジ コトパティオ」の開設や行事、スタッフについて案内していますが、まだまだ全ての学生が利用してくれているわけではありません。授業の合間など、短時間でもかまわないの

で、「英語があまり話せないけれど大丈夫かな」などと躊躇せず、少しだけ勇気を出して、足を踏み入れてくれることを望んでいます。



コトパティオ・  
スタッフの  
ジェフ（左）と  
ケビン（右）



定期的にイベントを開催。  
2015年11月20日に  
行われた  
感謝祭パーティーの  
告知黒板

## グロ

ローバルラウンジ「COTOPATIO」には、ジェフとケビンというアメリカ出身の二人のスタッフが常駐しており、英語を使って学生の相手をしてくれます。彼らは「英語の先生」ではなく、どこにでもいる「普通のお兄さん」です。ジェフはライブも行う音楽好き、ケビンはテレビゲームやアニメが趣味です。学生は、最初は気後れを感じることもあるかもしれませんが、ジェフもケビンも、そうした学生の固い気持ちをほぐし、気軽に英語を

話してみる雰囲気作りを大切にしていきますので、心配は全く無用です。「グローバルラウンジ COTOPATIO」は、1対1の対面会話も、複数人数での会話も、そして、例えばゼミクラス程度の人数でも楽しめるようにレイアウトされており、状況に応じてスタッフが対応してくれます。

## ジエフ

エフの強い希望があつて、「グローバルラウンジ COTOPATIO」では、お茶を飲みながら英語を楽しめるような工夫がされています。また、多くの学生にこのスペースを知ってもらふ必要があることから、定期的にイベントを行うこととして

## 感謝祭

パーティー (Thanksgiving Day Party) に参加したある女子学生は、「ほぼ毎日来ているけれど、話す機会が増えて楽しい。食べ物など身近なテーマを決めてくれるので話しやすいし、確実にリスニングの実力が上がっていると思います」と語ってくれました。

「グローバルラウンジ COTOPATIO」が、教室で英語を勉強するのは全く違う雰囲気であることはすぐわかると思います。もちろん、イベント以外の時でも、日常的に活用してもらいたいと思います。

## 本

格オープンから数ヶ月、確実に利用者が増えていきます。開設準備の段階では、オープンした後、閑古鳥が鳴いたらどうしようかと不安視する向きもありましたが、杞憂に終わりそうです。英語の実力を上げる方法はたくさんあると思います。その中でも、「使える英語」を学びたい

というのであれば、直接ネイティブスピーカーと話をしてみることが一番の方法です。本来コミュニケーションとは、そのようなものですから。学生たちに「グローバルラウンジ COTOPATIO」をぜひ活用してほしいと強く希望しています。

Global Lounge  
COTOPATIO

# キャリアデザイン

## プログラム

### 導入に向けて

キャリアデザインプログラム  
設置準備委員会 委員長  
学長補佐 **北山 聡**  
コミュニケーション学部准教授



を設立し、希望者から選抜して、キャリア意識の高い学生への支援を強化する計画です。

**第二**の特徴は、2年次より学部所属し、各学部の専門科目を学んでいくことです。「キャリアデザインプログラム」に入学した学生は、1年次には各学部の入門科目を4学部にわたって履修します。その入門科目を学んだ上で、2年次からの所属学部を選択します。

受験生の中には、大学に入ってから学びのイメージを具体的なものとして抱くことができないまま、大学選びや大学における学部選びを行っている人が少なくありません。これが入学後に、自分が学びたかったことと、自分が入った大学や学部で学ぶことができることとの差となつて、学びに対する意欲が低下してしまつ、いわゆるミスマッチ現象が起こる要因の一つともなっています。

「キャリアデザインプログラム」では、入学し専門の入門科目を学ぶことを通じて、自らの関心が高い分野を発見し、2年次から学部を選ぶことができます。2年次以降は、各学部のカリキュラムに沿って履修していくため、十分な専門教育を受けることが可能になっています。卒業時には所属学部の学士号を取得します。

1年次において4学部の入門科目を学ぶことで、広く社会科学的素養を養うことが可能になることもキャリアデザインプログラムで入学した学生のメリットといえるでしょう。

**第三**には、学部横断型の履修が可能な仕組みを設けます。本学では、社会科学の総合大

**2** 017年4月より新しい履修プログラムである「キャリアデザインプログラム」を導入することが認められ、現在カリキュラムなど具体的な計画が進められています。定員は50人として、各学部の定員から割り当て、AO

入試と一般入試・センター利用入試で受験生を募集する予定です。本学では、2004年に導入された学部横断型の教育プログラムである「21世紀教養プログラム」以来、13年ぶりに行う学部横断型プログラムの導入となります。

この「キャリアデザインプログラム」の学びの主な特徴としては、4年間を通じたキャリア

教育を行うこと、1年次に入門科目を学んでから2年次より学部所属し専門科目を学ぶこと、学部横断型の広い分野の科目を履修可能なことの3点があげられます。

**ま**ず第一の、4年間を通じたキャリア教育としては、少人数制の「キャリアデザインワークショップ」を1年次から4年次まで開講します。この「キャリアデザインワークショップ」では、学生自身が自らのキャリアを主体的に考える力を、少人数制の参加型の講義によって段階的に身につけていくことを目指します。また並行して、学内志塾「大倉進一層キャリア塾」

キャリアデザイン  
プログラムの  
イメージ図



学として経済・経営・コミュニケーション・現代法という4つの分野にわたって多くの専門科目を開講しています。これらさまざまな専門科目から、自身の関心により学部横断型の科目履修ができることは、学生主体の多面的な関心に基ついた学びを可能とすることになります。

現在でも各学部で他学部の科目をカリキュラムの一部に取り入れていますが、これを4学部に通化して拡大し履修可能科目を増やしたものがキャリアデザインプログラムの「学部横断履修科目」です。学生が履修する科目をテーマ

ごとに「クラスター」としてまとめて提示することで、学生個人の関心に基づき体系的履修を促すことができるような仕組みを作る計画です。これらを図解したものが、左に示したキャリアデザインプログラムのイメージ図となります。

**「キ」** キャリアデザインプログラム」の目指すキャリア教育とは、就職試験や面接対策という短期的に必要な就職対策のノウハウだけではなく、学生が生涯を通じて持続的に就業力を自ら育成していくための基礎となるものを身につけるための教育です。またキャリア教育を通

じて、大学で学ぶ学問と仕事・職業との結びつきを意識させることで、学生の学習のモチベーションを高めることができると考えています。

**就** 業力の基礎となる、論理的思考能力、自らの考えを表現し伝える力、必要な情報を探し出し整理し理解する力、問題発見・理解・解決能力といった力は、ジエネリックスキルとも呼ばれます。このジエネリックスキルは大学における学問的な学びを通して身につけることができるものです。その意味では、大学教育とキャリア教育は対立するものではなく、むしろ補完するものといえます。

大学における学びはジエネリックスキルを身につけるために有効であり、長期的に役に立つものであることを、学生に伝えることで、学びに対して意欲と関心を引き出すことができるでしょう。また2年次より学部を選択可能とすることは、本学が社会科学系4学部であることのメリットを有効に生かせる仕組みでもあります。

**「キ」** キャリアデザインプログラム」は本学が「安心の、就職力。」として、これまで強化してきた就業力育成を広報する路線と一致しており、キャリア教育の充実面を計ったプログラムを実施することで、これを強化できることが広報上の大きなメリットです。2017年度から3学部に導入予定のカリキュラム改革「進一層科目（仮称）」によるゼミやキャリア教育の強化と併せて、教学改革による教育力向上を広くアピールするものとして「キャリアデザインプログラム」を広報していく予定です。

2015年12月12日(土)、コミュニケーション学部開設20周年を記念してシンポジウムと懇親会が開かれました。当日は、前日と打って変わったの好天。加えてオープンキャンパスなどいくつかの行事も開催され、学内は一日中にぎわいました。

14時からのシンポジウム「コミュニケーションの現在とこれから」では、冒頭、私が「コミュニケーション学に何ができるか」と題して、とりわけコミュニケーション学教育の重要性について話しました。その後、柴内康文実行委員長による趣旨説明と登壇者紹介へと続き、松永智子の司会でシンポジウムが始まりました。

今回、パネリストとして、ドミニク・チェンさん(情報学研究者/I T起業家)、藤村厚夫さん(スマートニュース株式会社執行役員)、荻野NAOさん(写真家)の3名をお呼びしました。コミュニケーション学部の3コース、つまり「メディア」「企業」「グローバル」を念頭においての人選です。チェンさんは「コミュニケーションの現在とこれから」というテーマで、メディアに注目して話してくれました。

メディアは単なる媒体ではなく「情報を受け取られ、作り替えられる仕組み

# コミュニケーション学部開設20周年 記念シンポジウムと 記念懇親会

コミュニケーション学部長  
川浦 康至 教授

み」である。20世紀のメディアはマスだったが、今世紀のメディアはパーソナルないしプライベート(チェンさんはそれを可能にする「アルゴリズム」に注目する)である。それによって交流が起き、現実像が構成される。こうした発想から彼が開発したのが、Picseeというスマートホン用アプリである。これはメッセージャーの一種で、手軽に写真(語れない)ものが共有できるようにになっている(本アプリはApple Store Best of 2015を受賞)。いま手にかけている他のソフトも紹介しつつ、メディアでどこまで未来をつくれるかに挑戦しているように見えました。

藤村さんは「ニュース、メディア、そしてコミュニケーションの未来」と題して、サイト、アプリともにニュースに注目した仕事の意義を話されました。

「いま、新聞やテレビでのニュースはコミュニケーションのきっかけ、つまりコンテンツとして働いている。したがって、きっかけになるニュースは個人に依存する。その選別を自動化する(スマート化する)しくみをつくり、提供している。コンテンツをやり取りする相手とは文脈を共有する。選別されても残る良質な情報を提供していきたい。」



自分と関係のあるところでしかニュースも意味は持ちえない、つまりニュースの等身大性を強調されたのではないのでしょうか。

荻野さんのテーマは「別の天と地」でした。撮影の過程でのやりとりを紹介しながら、相手とのコミュニケーションを通じて見いだされる自分、つまり「コミュニケーションの私」を話されました。将来の自分に写真の判断を委ねるとも話されました。いわば今の「私」だけでものごとを決めない、



他者に委ねる、未来に委ねることの重要性を認識させられました。

後半は、パネリストごとのコメントを、報告順に桜井哲夫、佐々木裕一、深山直子が担当しました。主な論点は、関係における「文脈」の共有・非共有でした。

最後に、関沢英彦が締めめの挨拶として、学部教育との関連にふれるなかで、つぎのように宣言しました。

「文脈を共有しない人との間にどうすればコミュニケーションの橋をかけられるのか、そして、(人の)『そば』に  
いる技術をどう教えていけばいいのか、学部の課題としたい。」

づく記念懇親会は、すっかり日も落ちた18時から、6号館7階大会

議室で行われました。堺憲一学長から祝辞をいただいたあと、鏡割りに移りました。お酒は石川酒造の「多満自慢」です(東経大卒業生が営業でがんばっているそうです)。田村紀雄名誉教授(初代コミュニケーション学部長)、猪狩誠也名誉教授(同じく元学部長)、岩本繁理事長、堺学長、私の5名で樽を囲み、ふたを割りました。初めての経験ですが、無事うまく割れました(こだけの話ですが、ふたは軽く載っているだけなのです)。その瞬間、樽からいい香りがのぼってきたの言うま



でもありません。お酒が一通り行きわたったところで、田村先生の音頭で乾杯となりました。その後、池宮正才の司会で、岩本理事長や猪狩先生、現教員のスピーチをはさみながら、進みましました。さらに、そのあいだ、桜井ゼミ制作の「学部創設20周年記念ビデオ」が流され、当時のようすを懐かしく見ている方もいらっしやいました。

シンポジウムは、コミュニケーション学やコミュニケーション「学」を中心に「関係」について考える場として設定し、懇親会は、コミュニケーション「学部」を前面に、旧交や「新」交と、「関係」を深める場としました。

この日に合わせ、シンポジウム会場脇の交流ロビーで、「コミュニケーション学部20年のあゆみ」展を12月

8日から16日まで開催しました。具体的な開設準備の始まった1992年暮れから開設直後の1995年前半までを、「大学報」と「Campus Network」それぞれの関連記事をパネル展示し、当時の雰囲気を再現しました。開設以後については、年表や教員一覧、そのときどきのポスターで構成しました。

20周年記念企画は、これまでに、ホームカミングウィーク(6月と10月の各1週間での授業公開)、コミュニケーション学部のこれまでと、これから  
のコミュニケーション学を展望した『コミュニケーションという考えかた』、コミュニケーション学部の20年とコミュニケーション学』の刊行(7月)を行いました。今回のシンポジウムと懇親会、20年のあゆみ展が最後の記念企画でした。おかげで無事済みましたことをこの場を借りて関係者の皆さんにお礼申し上げます。なお当日配布した『コミュニケーションという考えかた』 repository.tku.ac.jp/dspace/bitstream/1150/9200/3/book01.pdf。シンポジウムのようすは、紀要『コミュニケーション科学』に掲載する予定でいます。今後ともコミュニケーション学部をよろしく願います。

# 日本列島の 地下で何が 起きているのか？

## 日本人であるということ

大倉記念学芸振興会学術講演会レポート

新正裕尚 経営学部教授〔地球の科学〕ほか担当

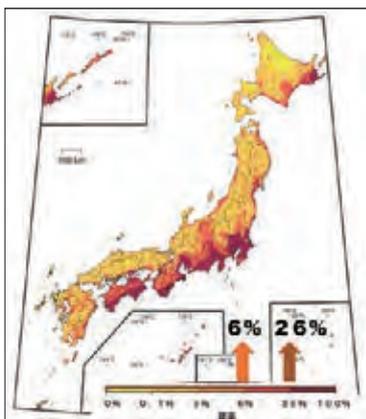
2015年10月24日、晴天に恵まれた土曜日に、大倉喜八郎記念学術芸術振興会学術講演会が行われ、E002教室がほぼ満員となる、約300名の聴衆を集めました。神戸大学教授の巽好幸先生をお迎えして、「日本列島の地下で何が起きているのか？—日本人であるということ—」というタイトルで、日本列島付近で起こる地震や火山活動について基礎から具体的事例まで懇切に語っていただきました。

まず、寺田寅彦の言葉を引いて2011年3月11日の東日本大震災について、またその3・11超巨大地震以降の日本列島の状況について述べられました。すなわち喧伝される地震活動・火山活動の活発化が事実であるかどうかという問題提起です。火山活動の活発化の問題として、朝日新聞社の取材に同行して西之島（小笠原諸島の火山島で東京の1000kmほど南に位置し、2013年に始まった噴火が継続し、島が成

長していることで知られる）、をヘリで視察された模様をスライドで解説されました。さらに、巨大地震のあとに火山噴火が見られることは事実、またそれを説明するメカニズムがあることも述べられました。続いて、マスコミや一部「専門家」が煽る、「千年ぶりの活動期に入った日本列島」といった表現がはたして妥当かについて、具体的に検証してゆきます。中世において地震や火山噴火の報告数が少ないのは、中央集権的な政治体制の弱体化によるものであり、江戸幕府の成立後に再び報告数が回復することをグラフで説明されました。すなわち、「千年ぶりの活動期」はあくまで見かけのものであるということなのです。

ただし、これは「活動期に入った」といった表現を否定しただけであり、決して安心して良いわけではない、すなわち変動帯である日本列島においては、地震も火山噴火も「普通」に「必ず」起こるものであり、常に防災意識を持たねばならない、ということを強調されました。

次に地震活動について手短かに語られました。特に啓発的であると感じられたのは、「地震予知」についての捉え方を地震発生までの時間と信頼度を軸にしたグラフで解説されたものです。



地震発生確率：今後30年間に震度6弱以上  
(講演資料より)

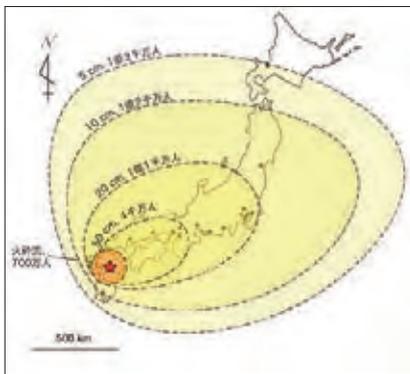
すなわち、リアルタイムで地震波を感じ知して警報する「直前予知」、信頼度は落ちるが地震断層の活動評価などに基づく「中長期予測」は可能でも、一般の人が思い描く「短期予知」はできない、したがって、減災が重要で、首都機能・人口の分散が重要であることが主張されました。

次にご専門である火山について話されました。地震と同様、火山噴火が頻発するのも日本列島については「普通」のことであり、その理由として、東北日本の下に世界最速で太平洋プレートが沈み込んでいることを述べられました。

さらに火山・地震列島に住むことの恩恵として「和食」に話題が移ります。グルメで知られる巽先生は和食と日本列島の成り立ちについての本を昨年出版されています（『和食はなぜ美味しい—日本列島の贈りもの—岩波書店』）。そのエッセンス部分を軟水・硬水の問



九州縄文人絶滅事件：鬼界アカホヤ噴火（講演資料より）



巨大カルデラ噴火：そのハザード（講演資料より）

題に絞って解説されました。すなわち火山性の地盤で急流の川を持つ日本ではミネラル分の少ない軟水が主体であり、海産物などの旨味成分を効率的に抽出できるので、出汁文化がひろがり肉食が発達したということとです。

「美味しい話」で締めることなく、最後に一番厳しい話題が控えていました。「巨大カルデラ噴火」です。まず7300年前に薩摩硫黄島の鬼界カルデラで起こった巨大カルデラ噴火により九州の縄文人が絶滅したことを説明され



神戸大学教授の異好幸先生

ました。そして普通の山体噴火と巨大カルデラ噴火のメカニズムの違いについて言及し、日本では九州と東北部（北海道で発生しうることを示しました。その発生確率を統計解析で求めると100年確率は約1%。決して無視できるものではありません。よく調べられた巨大カルデラ噴火である鹿児島錦江湾の始良カルデラ噴火を参照してそのハザードを推定すると、同様の噴火が中部九州で起こるならば、2時間以内に700万人死亡、1日以内に4000万人が厚さ50cmの火山灰に埋もれ、2日で本州ライフライン停止、1億2000万人が生活不能、救援活動もほぼ不可能という「日本喪失」の事態になることを示しました。死者数と発生確率をかけて得られる「危険度」では、最悪レベルの災害であるので、ひとりひとりが考えねばならない問題であることを強調されました。川内原発再稼働に関連して九州電力が巨大カルデラ噴火開始相当前に兆候を検知できるとしたのに対し、火山学者の多くは予測不可能とみており、文字通り「明日にも起こる」かもしれないものであると警鐘を鳴らされ、最後にこの10月に立ち上げられたばかりである、神戸大学海洋底探査センター(KOBECC)で「鬼界海底カルデラ」の構造解明に

挑むことを述べて話を閉じられました。講演後、様々な年齢層の方から質問が飛び、一つひとつ丁寧に回答していただきました。高校生も勇気を奮って、災害への備えについての質問をしてくれました。

「明日起こるかもしれない」巨大カルデラ噴火は、極めて衝撃的な事実で、それに関する感想を終了後に話されている人が数多くいました。会場に残っておられた中高年（私からみて年長者）には、「まあ、起こってしまったら仕方ないなあ」といった意見が見受けられました。その後、5号館入り口で集っていた高校生（と引率された教員）に声をかけてみると質問攻めにあい、その一つが、なんとか地下をモニタリングして噴火の予兆を知ることができないのか、という事柄でした。地下構造の推定方法や常時観測することの一般的な困難さについて説明しましたが、著しく困難な事柄に対しても、若い人は、なにか将来において解決する方法があるのではないか、という発想に向かうことに感心させられました。

というわけで、それぞれが、それぞれの感想を抱えて帰途についていたのだのではないかと思えます。豊かなお話をしてくださった異先生に改めてお礼申し上げます。

学術フォーラム

「災害避難と帰還」を

開催して

# 災害列島日本において

## 三宅島の教訓から

尾崎寛直

経済学部准教授

## 学ぶべきこと

2015年度の東京経済大学学

術研究センターの助成をいただき

て、去る10月24日(土)、本学大倉喜

八郎進一層館にて「災害避難と帰

還〜避難指示解除10年を迎える三

宅島の復興から考える〜」と題し

た学術フォーラムを開催させてい

ただきました(参加者144人)。

このような機会をいただけたこと

に感謝申し上げます。

開催主体は本学のプロジェクト

研究所のひとつとして発足した

「災害復興研究所」(代表・森反章

夫・現代法学部教授)で、これま

で3回のシンポジウムを開催して

きました。第1回は2011年3

月の大震災・大津波を受けて壊滅

的な被害を被った陸前高田市から

パネラーをお迎えし、とくに仮設

住宅への集落単位の入居などで被

災者の孤立を防ぐ活発なコミュニ

ティケアを実現する長洞地区の取

り組みの意義や後方支援の重要性

などを論じました。第2回は、福

島原発事故の放射能汚染によって

全村避難を強いられた福島県川内

村の苦悩と、再生に向けた困難や

課題を行政・民間それぞれの立場

から語っていただきました。第3

回は、全町避難から国の避難指示

解除を受けて、「帰還」に大きく

舵を切って町の再生に取り組み福

島県広野町から、町長(本学経営

学部卒)をはじめ商工関係者をお

招きし、さらに広野町の現状を研

究する研究者もパネラーに加えて、

さまざまな観点から町の将来像や

再生の課題について論じることが

できました。

これらの研究所によるフォーラ

ム開催の積み重ねを受けて、第4

回目のテーマとして選んだのが三

宅島です。まだ記憶に新しい方も

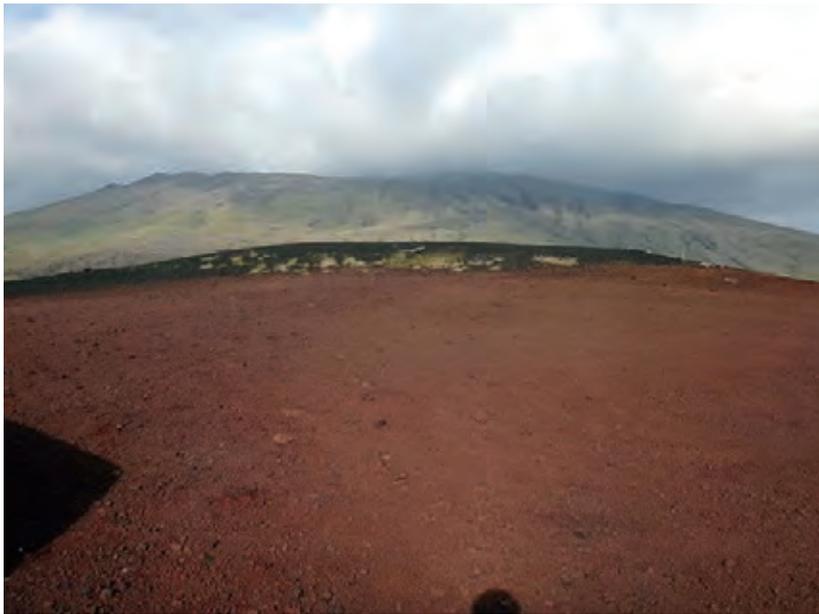
多いかもしれませんが、三宅島(東

京都三宅村)はこれまでも多くの

噴火を繰り返してきた島ですが、

とりわけ2000年8月の大噴火

は過去の活動の推移からは全く想



溶岩と火山灰に覆い尽くされた山麓



溶岩流が集落を飲み込んだ



火山ガスで枯死した木々



溶岩で埋まった体育館



溶岩で埋まった小学校跡

像できないものでした。全村民が避難をせざるをえなくなり、結果的に4年5ヶ月にわたる長期避難を強いられました。2011年の東日本大震災による長期避難が、ついに5年目に突入したことで、マスコミではその問題構造を追及する報道が3・11前後連日なされましたが、じつはそのわずか10年ほど前に、同様な長期避難で塗炭の苦しみを味わった方々がおられ

たことに、私たちはもっと思いを馳せてもいいのかもしれない。\*

三宅村＝三宅島は、生来から火山島として誕生した経緯があり、山腹の「噴火口」からマグマが流出した箇所が住宅地そばを含め島の至る所にあります。長い地球の営みの視点からすれば、マグマの岩盤の上に人が住み着いているよ

うなものだともいえます。そうしたなかで人々は火山と共に生きてきました。噴火は、記録にあるだけでも15回存在します。1085年の記録を皮切りに、1154年、1469年、1535年、1595年、1643年、1712年、1763年、1811年、1835年、1874年、1940年、1962年、1983年、2000年と続いており、とりわけ20世

紀に入ってからはいよいよ20年周期で発生してきたため、地元では「人間生きていくうち一度は噴火に遭う」という言い伝えがあるぐらいです。

しかし2000年8月の大噴火は、これまでと異なり山頂噴火や火砕流が起り、島内全体に大量の噴石と火山灰を降らせました。さらに、かつてないほどの火山ガス(有毒な二酸化硫黄など)が放出され、9月下旬には一日の放出量が5万トンに達する世界に例を見ない火山災害となったわけです。これにより三宅村は災害対策基本法に基づき全島避難を指示し、東京都災害救助法に基づく島民受け入れ支援を決定することになりました。

ところが、これまでの火山との付き合いの経験から噴火は短期間で終息するものと思いついていた島民の気持ちとはうらはらに、非情にも高濃度の火山ガス噴出は延々続き、最終的に島民は4年5ヶ月の間、慣れない土地での長期避難生活を送らざるを得ませんでした。島民の避難先は18都道府県におよび、東京都内での分布は23区26市3町3村にまたがっていて、



「日本で一番面積の広い自治体」だとの皮肉もあつたほどです。本学からも近い東京の多摩ニュータウンでも、多くの島民が都営住宅などで避難生活を送りました。

\* \* \*

今回のフォーラムには、①「島に戻りたい」という島民の意向を受けて2004年、「1年以内の全員帰島」を掲げて村長選挙に出馬、当選して帰島政策を牽引した平野祐康氏（震災当時は村役場の

財政課長）、②村の商工会の課長として、避難生活中も地場産業での生業手段を失った人たちを励まし、帰島後の村の産業復興に奔走した村上康氏、③東京都庁で帰島支援対策本部を担っていた竹内直佐氏、のお三方、さらに、④三宅村と同じように全村避難（※原発事故による放射能汚染のため）を経験し、村民の帰還に困難を抱える福島県川内村の商工会長・井出茂氏、と豪華メンバーをお迎えできたいと思います。

今回のフォーラムの企画の背景には、災害時における「全島避難」（全村避難）という政策決定、長期避難中の住民へのサポート（心理的ケア、医療福祉対策、コミュニケーション維持支援、就労継続支援及び経済的支援など）、帰島の決断及び帰島宣言後の帰還施策のあり方、などの大災害につきまとう難解な論点について三宅島の教訓を引き出すことにありました。それは、今回の東日本大震災・原発事故後においてもなお、長期避難にともなう累積したストレスなどによつて避難者の心身に異常をきたす事態（持病の悪化、要介護や認知症の発生、アルコール依存症の

発生、等）や自殺、家庭崩壊、孤立死等々の問題がくり返し発生しており、避難中の被災者支援及び帰還政策のあり方は非常に大きな課題を突きつけているからです。

ここで詳述する紙幅はありませんが、三宅村の対応で注目されるのは、全島避難の直後の段階で、避難が長期化する最悪の事態を想定して以後5年間の村政や住民対応などの工程表を計画として策定し、対症的ではなく着実にそれに沿つた対策を進めていたという点でしょう。これはじつは公表されていない計画なのですが、当時それを役場内で担つたのが平野氏だったので、避難直後から、村は役場機能を都内3カ所に移転・回復し、「精神的支援」、「経済的支援」、「その他の支援」に三分類した住民支援を開始しています。たとえば、全国18都道県に及んだ住民の避難先の把握を、避難から2ヶ月後には95%把握し、「広報みやけ」を月2回郵送し情報連絡を密にした手法は鮮やかだといえます。さらに村からの情報伝達や各種手続きの支援については、住民と行政を繋ぐ役割として、島民の中から20人を「情報連絡員」として選任し、避難先の住宅に直接訪問したり、電話での相談に応じるサービスも行いました。そして各地区の団地に入居した島民同士には、相互の連絡体制を構築するための「島民会」を組織してもらい、彼らがコミュニティ維持を図るために行う自主的な活動に村が助成したり、分散避難した島民同士の親睦を図るため一堂に会する「島民ふれあい集会」を多くのボランティアとともに合計9回開催しています。このように慣れない土地で避難生活を送る島民を孤立させないための各種取り組みを継続的に行えたのは、上述のような工程表があつたればこそといえるでしょう。

こうした三宅島の教訓はその後、の災害で活かされた面もありますが、同じ長期避難でさまざまな負の問題が発生してしまつた東日本大震災・原発事故の被災地のためにもっと教訓化されてよい面が多々あつたと思います。われわれもつと早くからこの教訓に学ぶべきであつたと不勉強を恥じる思いがあります。あらためてこのフォーラムを企画できたことを感謝したいと思ひます。

## 大倉学芸振興会芸術公演

### 久元 祐子 ピアノレクチャー・コンサート モーツァルトの命日に寄せて

2015年12月5日(土)、ピアニスト・久元祐子国立音楽大学准教授によるピアノコンサートを開催しました。18世紀後半に使用されていたピアノ2台を用いて、モーツァルトのピアノソナタを弾き比べ、当時の音の響きとともに、モーツァルトのウィーンでの暮らしぶりなどの話を交えた演奏会に、300名の聴衆が聴き入りました。



## 学生最大のイベント 「葵祭」終わる

ホームカミングデーも  
同時開催!



東京経済大学の大学祭「葵祭」が、2015年10月30日(金)から11月1日(日)までの3日間、東京経済大学国分寺キャンパスで開催されました。特設ステージでは、ダンスサークルやアカペラサークルなどのパフォーマンスが披露され、連日多くの企画が行われました。

また、10月31日(土)には、ホームカミングデーが開催され、約800名の卒業生が来場されました。葵友会の全国支部長会議・就職協力委員会と秋季懇談会・卒業後60周年同窓生懇談会も併せて開催されました。

## ゼミする東経大

### 北村真琴ゼミ 地域活性化プレゼン大会でグランプリ獲得



那須塩原市誕生10周年記念「大学ゼミナール那須塩原市活性化プレゼン大会2015」で、経営学部・北村真琴准教授のゼミ生3名のグループ「salt」が、「ビューティー・ファン・ラン」と題して、20代女性を対象とし、同市産の牛乳を使用した創作料理と美容を楽しみながら走るプランを考案しグランプリを獲得しました。

### 小木紀親ゼミ 学食で「TFTランチ」を実施

経営学部・小木紀親教授のゼミで例年実施している「TABLE FOR TWO (TFT) ランチ」が、大学食堂でメニューとして提供されました。

「TFTランチ」とは、対象となるメニューや食品を購入すると、開発途上国の子どもの学校給食1食分20円が、NPO法人TABLE FOR TWO Internationalを通じて自動的に寄付される国際的な運動です。

メニューは「ふわとろ食感、私のほわいとオムディ」と「がつつりジュー



シー、俺の鶏丼」の二種類。2015年12月11日(金)まで提供されました。

### 公認会計士試験(平成27年度) 結果

在学生2名・  
既卒生3名の  
計5名  
公認会計士試験に  
合格しました!

合格者のうち4名は、会計プロフェッショナルプログラム生です。

## 東京経済大学に御寄付いただいた方々の御芳名

みなさまより多くの御寄付をいただきました。ここに御寄付を賜りました方々の御芳名を掲載し、深甚の謝意を表します。御厚志は、東京経済大学の教育・研究活動のより一層の充実のために有効に活用させていただきます。今後とも、本学発展のために御支援を賜りますよう、お願い申し上げます。

2016年1月

学校法人 東京経済大学 理事長 岩本 繁  
東京経済大学 学長 堺 憲一

### 東京経済大学教育振興資金寄付御芳名

教育振興資金については、寄付金御芳名掲載にあたり、ご本人様のご了解をいただいた方の御芳名を掲載させていただきますました。

その他匿名ご希望の方6名様よりご寄付を頂戴いたしております。

(2015年7月1日から11月30日までのご応募分)

### 〔教育振興資金(一口10万円)〕

個人情報保護のため掲載は控えさせていただきます。

### 大学奨学基金寄付金

個人情報保護のため掲載は控えさせていただきます。

### その他寄付金

●陸上競技部への助成金として

個人情報保護のため掲載は控えさせていただきます。

●雲南大学からの経済学研究科修士課程への

推薦入学生に対する奨学金として

個人情報保護のため掲載は控えさせていただきます。

## インターネット寄付のご案内

大学奨学基金等につきましては、インターネットからの寄付のお申込みも受け付けております。

<https://fundexapp.jp/tku/entry.php> → 右記QRコードからアクセス可能です。→

入力内容：寄付目的、金額、氏名、住所、電話番号、メールアドレス、決済情報等  
決済方法：クレジットカード決済（Visa、MasterCard）



### ●申込完了確認メールについて

お申込みいただきますと、申込時に入力されたEメールアドレスに、申込完了確認メールをお送りします。このメールで受付及び決済手続きが完了となります。

### ●領収書の発行について

領収書は、各カード会社・収納代行業者から本学へ入金された後、ご送付となります。

そのため、領収書の発行までに、お申込み受付より約1～2カ月のお時間を頂戴しておりますこと、御了承いただきますようお願いいたします。また、領収書発行日は、お申込み受付日やカード決済口座からの振替日ではなく、本学への入金日となります。

### ●参考ウェブサイト「東京経済大学へのご支援をお考えの方へ」

<http://www.tku.ac.jp/tku/kifu/>

お問い合わせ先

東京経済大学 経理課 寄付金担当

〒185-8502 東京都国分寺市南町1-7-34 TEL：042-328-7737 FAX：042-328-7770